

Methodology 方法論

Methodologically Adler's approach is what we have called phenomenological operationalism.

方法論的には、アドラーのアプローチ（考え方、研究方法）は我々が現象学的操作主義と呼んでいるものである。

On the phenomenological, subjective side Adler held:

現象学的主観的側面においては、アドラーは固守した <次のよう（な立場を）> :

“More important than disposition, objective experience and environment, is the [individual's] subjective evaluation of these.

生来の気質や客観的経験や環境よりも重要なのは、それらに対する[個人の]主観的な評価である。

Furthermore, this evaluation stands in a certain, often strange relation to reality” (p.93).

さらに、この評価というものは、ある、しばしば変わった、現実との関係の中にたつのである。

Adler was convinced that “a person's behavior springs from his operation” (p.182).

アドラーは確信していた。<that 以下>と。

that 以下: 「人の行動は、その人の意見から生じる。」

“Individual Psychology examines the attitudes of an individual (p.185).

個人心理学では個人の態度（構え）を調査（考察、吟味）する。

On the operational, objective side Adler's principle was,

操作主義的・客観主義的な面からみたアドラーの原理は<次の“”内のようなのである>

“By their fruits ye shall know them” (pp.64, 283), that is, by overt behavior and its consequences.

「その実によって彼らを見分けるべし」つまり、目に見える行動とその結果によって。

In this respect Individual Psychology comes close to behaviorism, although the two differ widely in their respective concepts of human nature.

この観点では個人心理学は行動主義（行動主義心理学＝第2勢力）に近い。この二つ（個人心理学と行動主義心理学）は、各々、人間性についての概念は大きく違っているけれども。

In contrast to other subjectivistic approaches and psychoanalysis, one will not find in Adlerian literature such terms as real self, primary processes, inner forces, latent states, inner conflict, emotions that the individual has to “handle,” and many others, because they are like reifications of abstractions and cannot be operationalized.

他の主観主義的アプローチ（研究方法）や精神分析とは対照的に、アドラー派の文献の中には、実在的自己、一次過程、内なる力、潜在状態、内的葛藤、個人が“対処”しなければならない情動、やら、他にも多々あるようなこういった用語は見当たらない。というのは、それらの用語は抽象的概念を物象化したようなものであり、操作できる形にすることができないからである。

From this it follows that Individual Psychology is not a *depth* psychology, このことから、個人心理学は<in the sense 以下が入る>深層心理学ではない、ということになる。

in the sense that something substantive can be found lurking within the individual if you only dig deeply enough.

もし十分に深く掘り下げていけば、何か実在的なものが個人の中に潜んでいるのがみつかる、

という意味での

Rather it is a *context* psychology,

そうではなくてむしろ、(it=個人心理学) <in the sense 以下が入る> 文脈の心理学である。

in the sense that the meaning of a specific form of behavior can be determined by regarding it in its larger concrete context of which the individual himself is likely not to be aware.

～という意味で <～は that 以下> 行動の特定の型の意味は決定されうる。<By 以下によって。>それを、個人その人自身もおそらく気づいていない、より大きな現実的な文脈の中でみる（考える）ことによって。

この文をまとめると→そうではなくてむしろ、行動の特定の型の意味は、個人その人自身もおそらく気づいていない、より大きく現実的な文脈の中でそれを見ることによって決定されうる、という意味で、個人心理学は文脈の心理学なのである。

By the same token Individual Psychology is a concrete and idiographic science, more concerned with arriving at the lawfulness of the individual case than arriving at general principles, which is the emphasis of the nomothetic approaches.

こうした意味で、個人心理学は具体的で個性記述的な科学であり、法則定律的な研究法の重要点である一般的原則への到達よりも、個々の事例の合法性（正当性）への到達の方により強く関心を向けるものである。